

イスラエル・ユダヤ・中東がわかる隔月刊雑誌

みるこす

No.193

4

2024

❖ 聖書の世界 エッセイ

エルサレムの桜

池田 裕



❖ 一つの神と三つの宗教

宗教間対話に希望を

塩尻和子



エルサレム植物園に咲いた桜の花

今年の2月のエルサレム郊外のアーモンドの花はことのほか美しく、さらにそれに続いて開花したエルサレムの丘の植物園の桜も見事であったという。

花を愛したエレミヤやイエスが、そして詩人ハウスマンも、その桜を見たらきっと喜んだに違いない。

(p36～「エルサレムの桜」)



ミルトスはイスラエルに育つ低木。常緑でその葉は芳香を放ち不死と成功の象徴とされた。(イザヤ 41:19)

■ 中東・イスラエル情報

聖書の奇跡が今この時も —— 谷内意咲 4

■イスラエル並びにユダヤ人に関するノート■

トランプ氏のイスラエル観 —— 佐藤 優 6

■日本の非常識からみた中東の非常識■

ガザメトロ —— 滝川義人 13

■イスラエル 多角多論■

絶対的な勝利を目指して —— 齋藤真言 18

■日本・イスラエル コラボレーションの道■

日本企業がイスラエル企業と
真のパートナーシップを結ぶために —— 新井 均 28

■知っておきたい中東・イスラム■

ヒズボラの脅威 —— 光永光翼 62

● 聖書・歴史

●目からウロコの新約聖書●

福音宣教者フィリポの霊的変貌（上） —— 藤原豊樹 46

●サムエル記講話●

信頼されなかったダビデ —— ラビ・ベニー・ラウ 54

●一つの神と三つの宗教●

宗教間対話に希望を —— 塩尻和子 69

▲ エッセイ

▲聖書の世界 エッセイ▲

エルサレムの桜 —— 池田 裕 36

▲イスラエル御馳走帖▲

ガザ風 海老のトマト煮 —— 越出水月 60

表紙の絵：「ヤコブは、息子や孫、娘や孫娘、子孫を皆連れてエジプトに来た」（エジプト、創 46:7）【画・藤井克之】

教えて！ヘブライ語 52 ブックレビュー 78 シネマレビュー 80

声のひろば 81 編集後記 82

聖書の奇跡が今この時にも

谷内意咲

ハマスのテロ攻撃があった昨年10月7日はシムハット・トーラー（トーラーの歓喜）だった。1年かけてモーセ五書を読み終える喜びの祭典は忌まわしい虐殺の日に変わった。どんな悲劇が起きてもユダヤ人は聖書を読み続ける。翌週には再び創世記の最初から読み始め、バラシャット・ハシャブア（今週読む聖書の箇所）は巡り、半年が過ぎようとしている。今、すでにレビ記に入っている。

昨年12月中旬にはハヌカ祭を迎えた。紀元前2世紀、ギリシアの支配下にあったイスラエルの地で、ユダ

ヤ教を弾圧したアンティオコス4世に対してハスモン家のマタテヤたちが立ち上がり、反乱を起こして奇跡的に勝利したことに因んだ祭りである。汚されたエルサレムの神殿を清めたことで「宮清めの祭り」とも呼ばれる。9枝の燭台（ハヌキヤ）に1つずつ光を灯して8日間祝う。

戦争中に迎えたハヌカの初日、地上戦を展開しているイスラエル軍兵士たちが、ガザのパレスチナ広場でハヌキヤの点灯式を行なった。点灯の際には「マオーズ・ツール」が歌われる。マオーズ・ツールは「岩な

る岩」の意。神の別名で、それが祈りのタイトルになっている。

祈りの冒頭、「私たちの父祖たちの時代に、そしてこの時にも、貴神^{あなた}が行なわれた奇跡と不思議と救いと戦いに因んで、私たちはこれらの灯火を灯す」と宣言する。その後、ユダヤ人を虐げたエジプトのファラオから始まり、ユダ王国を滅ぼして捕囚したバビロニア、ユダヤ民族絶滅を企てたハマンなど、歴史的な故事が列挙される。

神の奇跡的な御手によって彼らの悪巧みは挫かれ、ユダヤ民族を守り

トランプ氏のイスラエル観

佐藤 優



〔撮影：森清〕

数少ないイスラエル支持の論説

乙君、ガザ紛争に関する日本の報道のほとんどは事柄の本質をとらえることができていません。

『みるとす』誌を含むさまざまな新聞、雑誌の連載で、私が繰り返し強調していることですが、これはイスラエルとパレスチナの対立でも、ユダヤ教徒とイスラム教徒との対立でもありません。ユダヤ

人、アラブ人、チエルケス人など複数の民族、ユダヤ教徒、キリスト教徒（イスラエルのアラブ人にはキリスト教徒が多いです）、イスラム教徒（ロシアの北コーカサス地域から19世紀に移住してきたチエルケス人はスンナ派のイスラム教徒です）などさまざまな宗教を信じる人々、あるいはいかなる宗教も信じない人々から構成されるイスラエル国家とテロリスト集団ハマスの戦いです。

ハマスが去年10月7日に、ユダヤ人という属性に基づく人々を無差別に殺傷する組織的なテロを開始したことに対し、イスラエルは応戦を余儀なくされたことにより今回のガザ紛争は発生したのであります。ユダヤ人とイスラエル国家が生き残るために、ハマスを掃討することが不可欠なのです。これは自衛権レベルにとどまらないイスラエルの生存権をめぐる問題なの

日本の非常識からみた中東の非常識

ガザメトロ

——平和を拒絶する暗黒のトンネル

滝川義人

○無知に無知を足して恥

2024年3月9日付日本経済新聞の読書欄「半歩遅れの読書術」に、歌人の川野里子氏が、「パレスチナの声を伝える書——無関心にあらう人生の尊さ」と題し、次のように書いた。

「2018年に岡真理著『ガザに地

下鉄が走る日』（みすず書房）が刊行された時、恥ずかしいことに、私はガザ地区に本当に地下鉄が通ったのだと思っただ。分断されている西岸地区とガザ地区がついに繋がったのだ、と。

そのような無知が一体どんなことなのか。長年パレスチナの人々を取材してきた著者は痛いほど焙りだ

す。『世界の無知・無関心・忘却という暴力のなかで人間性を否定され』た人達を造り出してきたのだ」

そしてこの歌人は「1948年にパレスチナに入植したユダヤ人によってイスラエルが建国された。それからのパレスチナ人の受難は想像を絶する。ある日突然、家や先祖代々耕してきた土地を追われ難民キャンプに追いやられる。そこを出ることもできず世代を重ねて生きるほかない」と主張。1947〜49年に生じた諸事情を無視して、目茶苦茶なことを書いた。恐らくこの本を読んだ無知が倍加したのである。

ガザ回廊に掘られたトンネルが、俗称でガザメトロと呼ばれているのも、この歌人は知らないだろう。

○人殺しのためのトンネル

メトロはメトロでも、こちらは人

イスラエル多角多論 60

絶対的な勝利を目指して

—あるイスラエル兵の叫び

齋藤真言

交渉は膠着状態

本誌が届く頃には、「鉄の剣」戦争が始まって半年が経過したことになる。ガザ地区での戦況に大きな進展が見られない中、イスラエル社会は疲弊し始めている。ガザ地区を事実支配してきたハマスの戦いは、戦争開始当初から長期戦になると予想されていた。当初から示されてきた戦争目標は「ハマスの壊滅」「人質の全員解放」「ガザ地区からテロ

の脅威を排除」だが、現在に至るまでどれも達成されていない。

一方、日常の生活はほぼ戦争前の状況に戻りつつあり、街中のカフェやショッピングモールは多くの人で賑わっている。戦争中とは思えないそれらの光景は、一見イスラエル社会のタフさを現わしているようにも思える。しかし人々の会話は、最終的に「この戦争の行く末」と「未だハマ스에拉致されている134名の人質の安否」に行き着く。

昨年11月下旬に人質110名が解放されて以来、その後の交渉に進展は見られず膠着状態が続いている。政府やメディアは「交渉は進展しつつあり解放は間近」と何度も発表してきたが、この数カ月間その期待は裏切られてきた。134名の人質の中ですでに死亡が確認された人は33名に上るといふ。一体何人が生きて帰ることができるのか。一刻を争う交渉の行方をイスラエル国民は苛立ちとため息をもって見守っている。

今年に入り、イスラエル国防軍(IDF)のガザ戦闘は大規模な地上作戦から地下トンネルでの戦いへとフェーズが変わった。多くの戦闘部隊がガザ地区から撤退し、ハマス幹部が立てこもり人質が監禁されている地下の長大なトンネルでの戦闘と、トンネル破壊に特化した特殊部隊や戦闘工兵部隊に比重が移った。ID

日本企業がイスラエル企業と真の パートナーシップを結ぶために

新井 均

伊藤忠の判断

1年前の2023年3月、日本で唯一の防衛・セキュリティ総合展示会 DSEI Japan が千葉の幕張メッセで開催された。主催者のウェブサイトによれば、世界66カ国から178の関連企業・団体が参加し、3日間の総来場者数は1万人を超えたという。この展示会の場で、伊藤忠商事の100%子会社である伊藤忠アビエーションと日本エヤークラフトサ

プライは、イスラエルのエルビット・システムズと協業に関する覚書を交わした。

それから約1年後、2024年2月5日付の日本経済新聞によると、親会社の伊藤忠商事は当該覚書を2月中を目処に終了すると発表。1月27日、イスラエルとハマスの衝突に関して国際司法裁判所（ICJ）がジェノサイド（集団殺害）やその扇動を防ぐ手段を尽くすようイスラエルに対して暫定措置命令を出して

おり、日本政府がその措置を支持したことを踏まえての決定だという。

ICJの裁判は多くのメディアが取り上げており、一見理解できるような表現だが、冷静にその内容を吟味すると、ICJの発表および本件に対する日本政府の立場と覚書破棄との間に合理的な関連性を見いだすことは難しい。

この裁判のポイントを明確にするためにも、まずICJの概要、そして南アフリカによる提訴の要点、I

エルサレムの桜

池田 裕

● 詩人ハウスマン

木のなかでいちばん美しい桜が今
枝もたわわに花をつけて

森の騎馬道のあたりに立っている
イースターの季節のために白を着て。

さて、私の生涯が七十年だとして
二十年はもう帰って来ない。
七十の春から二十を引けば
残るところはわずか五十だ。

花ざかりのものを見るのに

五十の春は少なすぎる。

さあ、あの森のあたりへ行って

雪と咲く桜を見よう。

英国の学者詩人アルフレッド・エドワード・ハウスマン (1859～1936) の処女詩集『シユロプシアの若者』(A Shropshire Lad) 所収の詩、二番の私訳である。

ハウスマンは中等学校の頃から成績優秀で、特待生の奨学金を得てオックスフォード大学に入学し、ギリシア、ラテン文学を研究する傍ら、詩の創作も続けるが、

福音宣教師フィリポの

靈的変貌(上)

藤原豊樹

前回はサマリアに起きたペンテコステについて学びました。福音宣教師フィリポの伝道によって神の言葉は受け入れられました。聖霊が降ることはありませんでした。ペトロとヨハネがエルサレムからやって来て、人々の上に手を置いて祈ると「ペンテコステの日に降った」聖霊が激しく降りました。

使徒言行録の著者ルカは、フィ

リポのサマリアの伝道について3つの時期——①サマリアに来た時 ②サマリア人に受け入れられた頃 ③靈的変貌を遂げた後——にわたって詳しく記しています。しかもギリシア語の動詞の用法によって彼の信仰の変化、またその伝道の違いが分かるような記述をしています。それぞれをギリシア語の原文から読んでいきます。(聖書の引用は新共同訳)

使徒 8:5

Φίλιππος フィリポス ビリポは	δὲ デ それで 他方 〔接続詞の小辞〕	κατελθὼν カテルソン 下って来て 下って行って 〔κατέρχομαι / 分・ア・男・単・主〕	εἰς イス ～の中へ ～に 〔前置詞〕
[τήν] ティン 〔冠詞〕	πόλιν ポリン 町 都 〔πόλις / 女・単・対〕	τῆς ティス 〔冠詞〕	Σαμαρείας サマリヤス サマリアの
ἐκήρυσσεν エキリセン 大声で告げはじめた 宣べ伝えていた 〔κηρύσσω / 未完・3・単〕	αὐτοῖς アフティス 彼らに	τὸν トン 〔冠詞〕	Χριστόν. フリストン キリストを

①サマリアに来た時

フィリポはサマリアの町に下って、人々にキリストを宣べ伝えました。(使徒8・5)

「宣べ伝えた」という動詞の原形

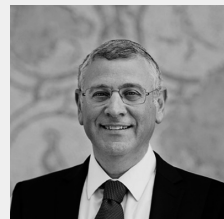
サムエル記講話

《サムエル記上 29章》

信頼されなかつたダビデ

ベニー・ラウ

(那須雄二訳)



הרב בני לאו

●戦争前夜の描写

サムエル記の編者は、時系列で出来事を記述するだけでなく、できるだけ私たちの興味をそそるよう工夫しているように見えます。

27章でダビデはイスラエルから逃亡し、ペリシテ人のガトの王アキシユの軍の一兵卒に転向しました。ダビデは君主の信任を得て、ツィクラグに拠点を与えられました。さらに28章冒頭には、ペリシテ人がイスラエルと戦うために軍勢を集結させたことが記されています。そのペリシ

テ軍の中で、ダビデはガトの王アキシユの近衛隊長として参戦しようとしていました。

その後28章では場面が変わり、サウル王に焦点が当てられます。サウル王はペリシテ人との戦いを前にして恐れ、助言を求めようとしてシユネムの女霊媒師にサムエルの霊を呼び出してくれるよう依頼しました。この霊媒師によってサムエルの霊が呼び出されましたが、サムエルはサウルを叱責し、サウルを見捨てて離れ去ってしまいました。

すっかり意気消沈したサウルを見

て、霊媒の女がサウルと家臣に肥えた子牛と種なしパンを差し出すと、彼はそれを食べて力を回復し、その夜のうちに立ち去ったという言葉で28章は終わっています。

ウクライナ出身のユダヤ人作家でシャウル・チェルニホフスキー(1875~1943年)という詩人がいます。現在の50シエケル札に肖像画が描かれている人です。彼は自身の作品の中で、この時のサウル王について「サウルは目を見開いたまま死の戦いに向かって行った」と表現しています。

ガザ風 海老のトマト煮

越出水月

去年10月から続くガザでの紛争

は、人道支援施設への空爆や、支援物資の不足などで悪化の一途を辿っている。前々回、ガザの料理を紹介した時には「次の連載を書く頃には……」と思い、前回もそう思ったが、今回もまだ今後の見通しが立っていないこと、子供たちが犠牲になり続けていることに、同じ時代を生きる人間として国連が機能していないことや国際社会に絶望を覚える。

◆ 食文化は環境で変わる

以前紹介したとおり、ガザは砂漠と海に挟まれた緑のオアシスであり、歴史的に交易の要衝であった。世界各地からの船や漁師によって食文化が伝えられたという。昔は焼くか揚げるしかなかった魚介料理も、さまざまな地域の人々との交流によって、変化していった。またイスラエルによる封鎖とこの制限によって、今も変化し続

こして みづき ● フードコーディネーター。上智大学神学部卒業。2007年〜08年ハイファ大学、ヘブライ大学留学。帰国後フードコーディネーターに師事。現在独立し、イスラエル他各国料理イベントを開催、ケータリングも行っている。

けているという。

漁のやり方も変わった。漁ができる海域が制限され、それ以上の沖に出ると砲撃を受けるといふ。たとえ許されたとしても、船のモーターの輸入が制限されており、車のモーターを改良して、修理しながら使い続けているため、沖に出ることができない。そのため、日本でいう底引き網漁で獲れるようなタラやハタ、ヒラメは獲れなくなってきたり、以前だったら大きくなるまで待つような小さなイワシが主流になっている。小さなイワシは安くて栄養価が高い庶

ヒズボラの脅威

光永光翼

ハマスのテロ攻撃から半年が過ぎた。依然として134名の人間

は捕らえられたままで、ハマスは民衆を巻き込んで抵抗を続けている。ハマスの指導層が今も逃げ回っているため、イスラエルはハマスの脅威を完全に排除することができず、ガザから撤退できない状況が続いている。しかし忘れてはならないのは、ガザという南部での戦いと同時にイスラエルには北部にも大きな脅威が存在すること

である。レバノンのイスラム過激派ヒズボラである。

2023年10月7日、ハマスがテロ攻撃を始めたのと同じ日、ヒズボラはハマスとの連帯を示してイスラエルにロケット砲攻撃を始めた。翌10月8日、レバノン領内からイスラエルへの侵入を試みたヒズボラ戦闘員が無力化されている。ヒズボラの攻撃は今も止むことなく、イスラエル北部に無差別攻撃を繰り返している。

今回は、このヒズボラについてその本質に迫ってみよう。

ヒズボラとは

まずヒズボラという名前について、アラビア語では「ヒズブ・アッラー」で「アラール（神）の党」を意味する。1982年に結成されたイスラム原理主義の政治・武装組織である。宗派はイランと同じシーア派。長年イランから政治的・軍事的支援を受けており、イランとの距離は極めて近い。ヒズボラはイスラエルをはじめアメリカや欧州連合、エジプトなどのアラブ諸国がテロ組織に指定している。日本も同様である。

レバノンを中心に活動するヒズボラの目標は、イラン型のイスラム共和体制をレバノンに樹立させ、非イスラム的影響をその地域

宗教間対話に希望を

塩尻和子

● イスラームフオビタ

これまで筆者は、日本人にはわかりにくいと言われているイスラームに関して、同系列のユダヤ教・キリスト教との対比を考察しながら客観的な解説を試みてきた。この度、最終回を迎えて、日本人とイスラームとの関係を考えてみたい。

日本ではイスラーム世界との歴史

的つながりが薄いために、イスラームは理解しにくい宗教だと思われることが多く、一般の日本人がイスラームに関する客観的な知識を持つことは難しいと考えられている。しかし今日、日本でもイスラーム教徒、ムスリムの数は、急速に増加している。イスラーム圏から来日した信徒だけでなく、自らイスラームを選ぶ日本人も含めて、日本のムスリム人

口は2020年には23万人を超え、増加傾向にある。国内に建設されたモスクは110カ所に達する。

私たち日本人にとってイスラームを正しく理解することは、その他の宗教を学ぶことに比べれば、かなり様相の異なったものになるかもしれないが、イスラームがユダヤ教とキリスト教と同じ伝統上に発祥した兄弟宗教であることを学ぶなら、この3宗教への理解度は急速に高まるであろう。しかし、特にキリスト教の側からの「キリスト教とイスラームとは全く異なり、イスラームとは父祖伝来の敵同士である」という、十字軍以降も止むことのないプロパガンダによって、なかなか理解が進まなかった。

イスラームが外側の世界から偏見と誤解をもたずに眺められるということは、この宗教が西暦610年に

○ ギャラリー「イスラエルの風」が贈る今月の一枚 ○



オリーブ山のロバ 撮影・平岡真一郎

オリーブ山の麓^{ふもと}、イエスが十字架にかかれる前夜、血の汗を滴らせて祈られたゲッセマネの裏側にあたる広場。ロバが草を食むのどかな光景が広がっている。イエスは最後、まだ誰も乗ったことのない子ロバに乗ってオリーブ山からエルサレムに入城された。

★手漉き和紙にプリントした、絵画のような独特な風合いをもつ作品です★

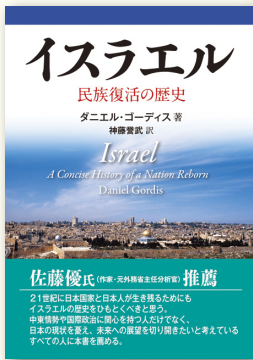
サイズ

41×32cm ⇨35,200円

制作元：ギャラリー「イスラエルの風」
〒183-0042 東京都府中市武蔵台 2-18-24

お問合せは
ミルトスへ

A5版 488頁 ¥3,080



イスラエル 民族復活の歴史

D・ゴードイス 著
神藤誉武 訳

イスラエル国がどのように復活し現在に至ったか、聖書時代から紐解き、ユダヤ人の辿った歴史を分かりやすく紹介する、イスラエル近代史の決定版。これ1冊でイスラエルのすべてがわかる！

四六版 160頁 ¥1,870

イスラエルの翼 エルアル 世界一安全な航空会社

光永光翼 著
田中マコト 漫画

エルアル・イスラエル航空の歴史を通じて、ユダヤ人の歴史とイスラエル建国がわかる。楽しい漫画を交えた笑いと涙の物語！



イスラエル・中東を知る

四六版 284頁 ¥2,750

わが親愛なる パレスチナ隣人へ

イスラエルのユダヤ人からの手紙
ヨッシェ・クワイン・ハレヴィ 著
神藤誉武 訳



Letters to My Palestinian Neighbor
Yossi Klein Halevi

ニューヨークタイムズ・ベストセラー

「イスラエル・パレスチナ紛争に関する最高入門書」

ジェフリー・ゴールドバーグ
著 (ワシントンポスト) 編集委員
田中マコト 訳

わが親愛なる
パレスチナ隣人へ
イスラエルのユダヤ人からの手紙

Y・K・ハレヴィ 著
神藤誉武 訳

パレスチナ紛争の入門書。互いにアブラハムの子孫として祝福の基になることを促す画期的な書。

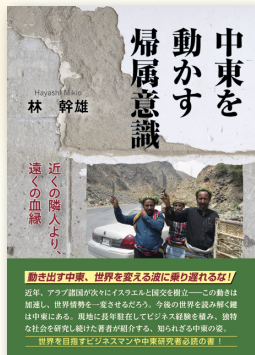
中東を動かす 帰属意識

近くの隣人より
遠くの血縁

林幹雄 著

中東各地に数十年間駐在して研究し続けた著者独自の視点と体験を元に中東を紐解く。

A5版 260頁 ¥2,750



イスラエル・ワインをご紹介します！



新登場

ワインに関するお問合せ・ご注文は
ミルトスまでどうぞ！
● 電話 — 03-3288-2200
● ファクス — 03-3288-2225
● メール — pub@myrtos.co.jp
(株)ミレジウムからの発送になります。

雑誌 89063-04